

## 今、キーパーソンが 考えていること

今回の  
キー  
パーソン

Colors,Future!Summit2023製作委員会  
**須之部 為師 委員長**

川崎で活躍する企業や地域のキーパーソンに今考えていることや見据える未来を聞くインタビュー記事。

今回は、川崎市制100周年記念事業の共同事務局である「Colors,Future!Summit2023製作委員会」委員長の株式会社ホリプロ須之部さんに聞きました。



株式会社ホリプロ  
川崎プロジェクトルーム副部長  
**須之部 為師 様**

株式会社ホリプロ  
「文化をプロモートする人間産業」という企業理念  
を持つ総合エンターテインメント企業  
【本社】東京都目黒区下目黒1丁目2番5号  
【ウェブサイト】<https://www.horipro.co.jp/>

### 1 スペルノーヴァが川崎にオープン

—ホリプロがプロデュースするライブハウス「スペルノーヴァ」が今秋、こけら落とし公演を迎えました。

**須之部** 日本にはこれまでになかった新しい施設だと思っています。川崎市は行政としては珍しくいわゆる「若者文化」を推している、他の自治体ではあまり見ない取り組みをしていますよね。そういった意味でも、様々な要素がうまく重なって、川崎にオープンすることができたと思っています。

—確かに「若者文化」を推している自治体は他にはあまりないかもしれませんね。

**須之部** 例えば東京は若者が多い反面、川崎の比ではないくらいに多くの規制を設けていると思います。その中でも、豊島区はアニメイトがあり、コス



スペルノーヴァカワサキ

プレのまちでもあり、例外かもしれません。そこそそペルノーヴァのモデルの一つが、実は南池袋公園なのです。

—川崎は多様性に富んでいる分、逆にこれといったブランドを打ち出しづらい面もあります。

**須之部** 確かに、初めて来た時は何も特色が見えませんでした。スペルノーヴァができるまで川崎に足を運んだことはありませんでしたね。

—川崎は「最終目的地」になる場所がまだまだ少ないと言われます。

**須之部** 住んでいる方の幸福度はかなり高いとは思いますが。シネコン、ラゾーナといった大型商業施設がある一方で自然豊かな土地でもあります。川崎、武蔵小杉、溝の口、新百合ヶ丘とおのこの地域が生活圈としてとても充実している印象があります。ただ、それって「住んでいるだけ」なのです。アクティブなものを求めるには都内へ出てしまう。富士通の本社機能が移転してくるとか、新川崎や殿町など、まちとしての可能性は生まれつつあるのですが、何しろプレーヤーが少ない。

—では、川崎のポテンシャルとは何でしょうか。

**須之部** 今回、市制100周年のイベント「Colors,Future! Summit2023」を開催してみて、トークだけのイベントなのに市民の方が様々なテーマに関心を持って来場してくれました。そういった意味では、人材の奥行、ポテンシャルを感じましたね。

## 2 Summitで実現しなかったこと

—「Colors, Future! Summit2023」では、普段出会えないような方々が出演されました。

**須之部** 企画の時点で日本有数のプロフェッショナルをキャスティングしようと思っていました。全国のプロフェッショナルに川崎で活躍している人材をマッチングさせたら、「おっ！」と思わせるような話が出てくるかな、と。世間で行われているようなカンファレンスには内輪受けのような印象があり、つまらないと感じることもあったので、自分で予定調和にならない面白いものやってみようと思いました。

—一緒に事業を進めていく中で、市職員の印象はありますか。

**須之部** 行政職の殻にとらわれているかなと思いました。でも、世の中、皆そうです。私は音楽の人、ITの人、メーカーの人、と言いがち。でもそうすると視野が狭まってしまいます。本来、行政職はもっとジェネラルであるべきで、視野を広げ、何でもガツガツと首を突っ込む「ダボハゼ」であることが持ち味なのです。でもそういう匂いがないなあ、と。そうすると視線が上がらない。今回の製作委員会は8団体による「共創」を掲げているのですが、共創に必要な視野を持つことが難しいご時世ではあります。目先で考えず、長いスパンでの土壌づくり、将来への基礎作りが重要だと思っています。

## 3 川崎を「尖らせ」て好循環を生む

—10年後の未来はどう描かれていますか。

**須之部** 労働人口は減ってインフレになるでしょう。このまま金融抑圧が続くのであれば、海外から働きに来る人はいなくなるでしょうね。米ドルベースのGDPもかなりインパクトのある落ち込み方です。川崎市役所は、日本の在り様とは違う、ある意味で独立国のようなものを目指す覚悟が必要なのではないでしょうか。OIST（沖縄科学技術大学院）やスタンフォード大学のように海外から人が集まるハイエンドな教育・研究機関を作るとか、シリコ



ンバレーのように世界レベルのスタートアップが生まれる土壌を10年、20年かけて作るとか。「Colors, Future! Summit」の制作過程でも、行政職の方からは「154万人のため」という言葉を何度も何度も聞いてきましたけれども、その度に「そんな154万人のためにサミットをやっているのではない」と僕はずっと言ってきました。先鋭的な企画や政策を打ち出し、集中的に取り組むことが川崎市全体に好影響を生むのです。日本全体の地盤沈下は既に危険水域を超えている印象がありますが、そこに引っ張られずに、川崎を「尖らす」ことで全体を牽引するようなことをしないといけないと思います。

—「尖らす」ためには、周囲の抵抗感が強くても説明する力が今まで以上に必要かもしれませんね。

**須之部** 説得とか説明に追われすぎず、先に大きな絵図を描き、それをどうやって実現していくかという話をしないことには進みません。細かいことで同意を得るのは難しいので、総論で賛成ならばとりあえずやっていく、という姿勢以外にありません。ある方向性を示した時に、おもしろそう、やらせてみよう、と思ってもらえることをやるべきです。

—最後に、「川崎らしさ」とは何だと思えますか。

**須之部** 能動的な「らしさ」はまだないですね。「東京にあるから、横浜がこうだから」と言っていて、まだ色がない。「川崎」で攻める感じがせず、まだまだ気楽な印象です。そもそも東京がヘッドクォーターでないといけないのか、考えてほしいです。あと10年経てば、川崎でも労働人口が減って、どんなに好待遇であっても働く人がいなくなります。その時に慌てても遅いのです。